

## ＜ラウンドテーブル報告1＞

### 学生の主体的学びを伸ばす授業の創り方 —初年次教育の授業デザイン，学生が楽しみ学ぶ授業実践法， 学習環境と学習支援に求められるもの—

【企画者】 清水 亮(同志社大学学習支援・教育開発センター)

【司会者】 清水 亮(同志社大学学習支援・教育開発センター)

【話題提供者】 鹿住大助(島根大学教育開発センター)

上野寛子(明治学院大学教養教育センター)

清水 亮(同志社大学学習支援・教育開発センター)

#### 1. はじめに

2012年8月28日の中教審答申では、学士課程教育の質的転換が「待ったなし」の課題であり、きわめて切実な問題であることを改めて認識する必要があるとしている。「学生に何を教えたか」から「学生が何を学び、できるようになったか」へ大学教育のパラダイムがシフトする中、学生が生涯学び続け、主体的に考える力を、大学はどのように育成すればよいのか。このラウンドテーブルでは、学生の主体的学びを推進するため、奮闘しているらっしゃる島根大学の鹿住大助先生と明治学院大学の上野寛子先生に実践をご紹介いただき、参加者と共に、学生の主体的学びを伸ばす授業の創り方について、初年次教育の授業デザイン、学生が楽しみ学ぶ授業実践法、学習環境と学習支援に求められるものを中心にワークを通じて考えた。

#### 2. 話題提供 1

##### 「初年次セミナーの授業デザインと実践」

##### 島根大学

島根大学では、初年次教育のモデル授業として2008年度から初年次セミナーを開講し、翌2009年度からは全学で初年次教育プログラムを実施している。初年次セミナーは全学共通教育の選択科目として、全学部の学生を

受け入れている。その受講学生数は年々増加傾向にあり、2013年度は570名の新入生が受講している(10クラスに分割)。

初年次セミナーは多くの大学で実践されているが、年々多様な学生が入学してくる現状において、どのように授業を計画し、またどのようにその計画を修正していくべきか、各大学の現状と知見を共有する必要がある。

本発表では、認知科学や学習科学の成果を取り入れながら、初年次セミナーの授業デザインをどう構想し、導入すべきかを、森朋子(2012)「初年次セミナー導入時の授業デザイン」に基づいて解説した。学生同士が学び合い、多様化を個性として活用できる授業デザインを用いることとした。

次に、これまでの授業実践から導き出された成果と課題をふまえた改善点についてふれた。初年次セミナーにおける学生同士の学び合いの効果を維持したまま、学習スキルの向上、学生数の増加、カリキュラム上の位置づけの変更に対応するため、2013年度からPBL型授業として展開したことを報告した。

最後に、授業において学生が主体として活動できる契機が、学習者の個の違いを共同性の中で活かす授業デザインから導き出せるのではないかと提起し、今後もデザイン実験の中で模索していくと述べた。

### 3. 話題提供 2

#### 「学生が楽しみ学ぶ授業実践法」

明治学院大学

学ぶ意欲のない学生から学びたい学生まで、入学を認めた大学は学生の力を伸ばすことが社会的責務である。しかし、学習意欲や基礎学力が多様な学生を対象に授業を行うことは大変難しい。大学教育の質的転換にはマクロからミクロまでさまざまなレベルでの改善・改革が必要である。多様な学生を育てていくには、教員自身の教育力向上と学生に対するきめ細やかな心配りがますます求められる時代となっている。

大学の初年次では、受身から能動・主体型へと姿勢を切り替えることが重要であり、そのためには適切なカリキュラム・マップの整備が不可欠である。しかし、全学的な検討や実施までには時間がかかるため、私自身が担当する授業を総動員し、多人数から少人数までさまざまな形式の授業を実践してきた(実験・実習・アカデミックスキル習得教育・多人数双方向型講義・資格取得講座・リレーレクチャーによる学際的講義、合計 12 科目)。これらの授業で基本にしている「楽しい授業サイクル(出席する→集中力を引き出す→新しい世界に入り込んで楽しむ→あつという間に 90 分が過ぎる→来週の授業が待ち遠しくなる)」や、多人数授業でもみんなで楽しむ授業のコツ(四つの要素)を本発表で紹介した。そして、学生自身が授業の中で「楽しいと感じる時間を積み重ねる」ことにより学ぶ意欲を向上させ、深い学びへといざなうことができることを示した。

最後に、これらの実践を通して見えてきた共通性と多様性についてお話した。現代社会に生きる学生が身につけるべき必須の知識や力とは何か。それらを学ぶ必然性を学生自らが感じるようにするにはどうすればよいか。初年次において主体的な学びへと切り替えていくために教員がすべきことを考えた。

### 4. 話題提供 3

#### 「学習環境と学習支援に求められるもの」

同志社大学

学習環境の整備を目指して、多くの大学でラーニングコモンズが建設されている。ラーニングコモンズは、学習環境を考える際に重要な「空間」にあたる。建物も重要だが、ラーニングコモンズの成否を決めるのは、指導者の質であると考えられる。教員が、授業をデザインする際に、その「空間」が活かされる「活動」と「共同体」の創生を念頭にアクティビティを盛り込めるか、そのアクティビティを実現するために必要なサポートを、コモンズのスタッフが提供できているかが成否を分けるのではないだろうか。ディー・フィンクは、総合的な授業設計のためには、状況要因を把握した上で、学習目標・授業と学習活動・フィードバックと評価の 3 要素を念頭に授業を設計することが必要であるとし、「適正な授業設計と、適正な教授法により、適正な結果が実現される」と強調している。

目の前のさまざまなレベル、ニーズ、類型の学生を主体的な学びに誘うために、どのような授業デザインが必要で、セーフティネットして、どのような授業外の学習支援が求められているか考察した。

### 5. おわりに

学びの主権者である学生を主体的な学びに誘うためのキーワードは、「楽しい」ではないだろうか。「楽しさ」が、新たな学びに通じる。二つの実践例に続いて、学習環境・学習支援に求められるものについて考え、ワークを通じて、参加者がお互いに、自らの授業デザイン、授業実践、学習環境・学習支援にもとめるものを振り返り、ラウンドテーブルが一体となって、学生の主体的な学びを伸ばす授業の創り方について考えた。新たな挑戦への起爆剤となったなら、うれしい限りである。